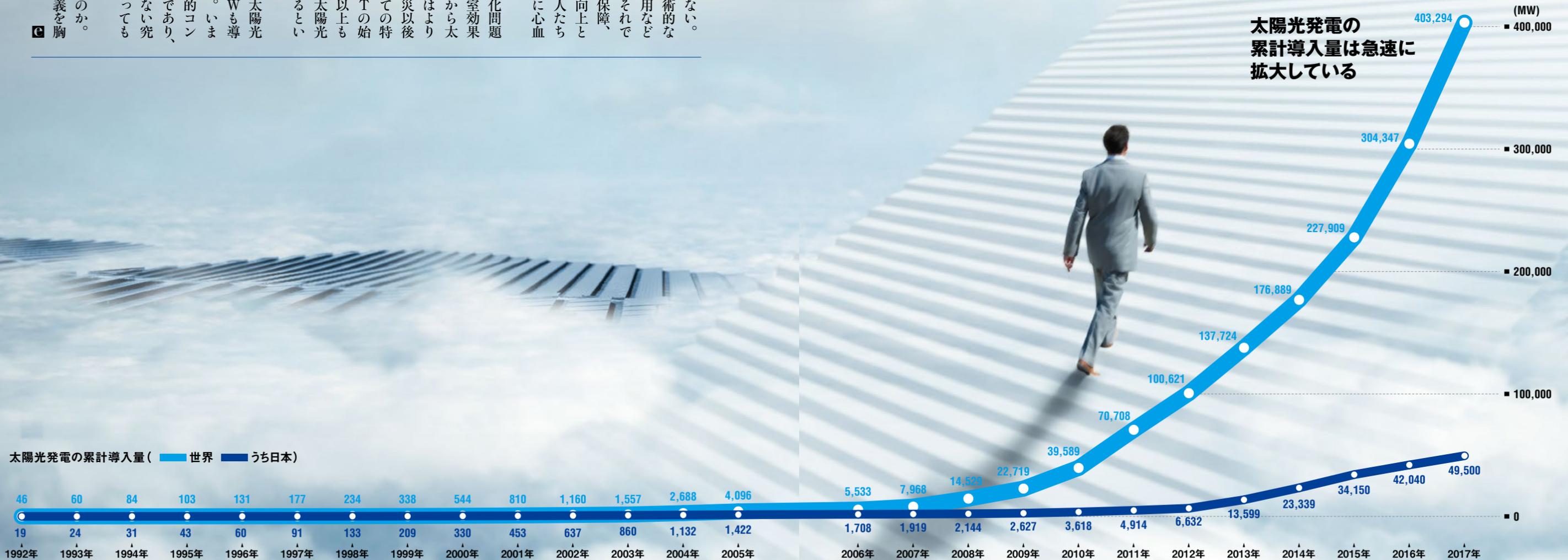


胸に刻もう！ 太陽光発電の大義

(本誌・楓崇志、岡田浩一、平沢元嗣)

太陽光発電の
累計導入量は急速に
拡大している



なぜ太陽光発電なのか。日本では、太陽光発電の急速な導入拡大に伴い、歪みが生じ、最近はその存在をも否定する声まである。

増大する国民負担、相次ぐメガソーラー反対運動、杜撰な設計・施工・販売、太陽光パネル飛散事故、住宅用太陽光パネルの火災問題まで取り沙汰されている。だから、太陽光発電に対して負のイメージを抱く衆人の心情は分からないでもない。

ならば、なぜ太陽光発電はここまで普及したのか。歴史を辿れば、1954年に米国ベル研究所で太陽電池が誕生した。日本では、73年の第一次オイルショックをきっかけに開発機運が高まり、翌74年には『サンシャイン計画』が発足、石油の代替源となり得る再生可能エネルギーを推進しようとして、国家プロジェクトとして開発が進められた。

当時の太陽光パネルの変換効率は数%に過ぎない。経済性どころか、技術的な障壁が高く、電力利用など夢のまた夢だった。それでも、エネルギー安全保障、エネルギー自給率の向上という大義を胸に、先人たちは太陽光発電の普及に心血を注いだのだ。

やがて、地球温暖化問題が顕在化すると、温室効果ガス排出削減の観点から太陽光発電の導入意義はより高まる。東日本大震災以後は、分散型電源としての特性が期待され、FITの始動と相俟って50GW以上も普及し、国はついに太陽光発電を主力電源にするという方針を掲げた。

世界を見渡せば、太陽光発電が年間100GWも導入される時代である。いまや太陽光発電は世界的コンセンサスを得た電源であり、人類にとって欠かせない究極のエネルギーと言っても過言ではなからう。

なぜ太陽光発電なのか。いま一度再考し、大義を胸に刻もう。